

《論考編》

長浜曳山祭と周辺村落

―長浜囃子保存会以前のシャギリを中心に―

上田 喜江

① はじめに

現在、シャギリは囃子保存会に所属する大人や子どもによって傳承されている。しかし、このような形式になったきっかけは、昭和四六年に長浜囃子保存会（以後囃子保存会とする）ができてから以降のことである。その囃子保存会も独自の曲を用いている山組（月宮殿・狸々丸・青海山・萬歳樓）と、長浜市四ツ塚（旧長浜市）の曲をもとに作られた囃子保存会の曲を用いている山組とがある。

本稿では囃子保存会ができる以前のシャギリを担っていた人びとについて触れるとともに、保存会結成までの経緯を考えてみたい。

② 周辺地域のシャギリとその担い手

昭和四六年に囃子保存会が設立されるまでは、周辺村落の人びとがシャギリに訪れていた。平成一九年に囃子保存会がまとめた調査結果によれば、長浜市本庄（旧長浜市）・長浜市南田附（旧長浜市）・長浜市大東（旧長浜市）・長浜市布勢（旧長浜市）・長浜市唐国（旧虎姫町）が曳山祭に関与していたことがわかったが、平成二三年に実施した本調査ではさらに、長浜市四ツ塚（旧長浜市）や長浜市大成亥（旧長浜市）

といった周辺村落の関わりについても明らかになった。

これらの村落がいつから祭りに訪れていたか不明な点も多いが、平成二三年に調査した結果を以下に記す。

(1) 長浜市本庄（旧長浜市）

T氏（昭和一〇年生まれ）の話によれば、四ツ塚から本庄に婿養子にきたO氏（昭和二年生まれ）の呼びかけでシャギリをおこなうようになった。O氏は四ツ塚でシャギリをしており、本庄に婿養子にきた昭和三三、四年頃に、シャギリをしないか周囲に呼びかけた。呼びかけにより昭和二年生まれから昭和一一年生まれまでの六人が集まった。

曳山祭では高砂山・月宮殿・萬歳樓などでシャギリに関わったことがあった。曳山祭へは昭和三三、四年から昭和五〇年頃まで行っていた。

シャギリの引き受け方は、四ツ塚と本庄とが一緒になって二つの山組を引き受け、四ツ塚と本庄で一つずつ分担する。基本的に本庄の六人で一つの山組を引き受けるが、四ツ塚で人が足りないときは手伝うこともあった。

山組によって吹く曲が違うということはなく、曲は「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「起し太鼓」・「奉演間」があった。巡行中は「神楽」か「御遣り」を演奏した。囃子方は亭に居るため、曳山の下にいる山組の人から指示されることはなく、曲の進行はすべて本庄のシャギリを吹く者で決めた。

祭りが終わると、次の年の出番山の人が、来年のシャギリを頼みにきた。御礼はだいたい決まっていて、まとめて支払われた。

九月におこなわれる本庄の祭りでも賑やかしてシャギリをしたことがあった。

(2)長浜市大東(旧長浜市)

MG氏(昭和三年生まれ)の話によれば、長浜市八幡中山(旧長浜市)から大東へ婿養子に来ていた男性の兄がシャギリをしていた。その男性を通じて、シャギリをしてみないかと誘われたのがシャギリを始めたきっかけだった。それまでは大東にシャギリはなく、教えてくれる人もいなかった。

竹笛を購入し八幡中山の師匠のもとへ習いにいった。ここでは八幡中山でシャギリをしている人達も習っていた。一緒に習ったのは、大正生まれであろうと考えられるN氏とほか数名で、週に一回程度習いにいった。当時は、自動車も何もなかった頃で、自転車で通った。中山で習っていたのは長浜のシャギリで、「戻り山」・「登り山」などであったが、譜面は無く口伝で教えてもらった。笛の音が出なかった者もあり、モノになったのはMG氏とN氏の二名であった。

あるとき、MG氏とN氏は長浜曳山祭で人が足りないのて来ないかと誘われ本日に手伝いに行った。そのときに行ったのは月宮殿(田町組)だったが、一度きりであった。当時の年齢は思い出せないが二〇歳前後の独身の頃だった。ME氏(昭和七年生まれ)によれば、曳山祭へ行ったのは終戦後の昭和三〇年代頃であった。

当初からシャギリに興味があり習っていたが、結果的に曳山に上がることになったようである。一度曳山へ上がった後は、もう上がることもなく、自然消滅的にシャギリを習うのをやめてしまった。

(3)長浜市南田附(旧長浜市)

I氏(七五歳)によれば、父親(明治三六年生まれ)が南田附でシャギリをしていた。竹生島への遊覧船内や、長浜の映画館で無声映画の

余興として吹いていたほか、長浜曳山祭では萬歳樓(瀬田町組)で演奏していたと伝えられる。しかし、I氏や現在健在のメンバーは曳山祭で演奏したことはない。

南田附では今から三〇年ほど前、当時の自治会長のH氏ら三名を指導者として囃子保存会が再結成され、南田附にあった太鼓を張り替え、ハッピも作った。当時はまだ外部からきた住民は少なく戸数は一〇〇戸ほどでまとまりがあり、地域ぐるみで結成できた。

シャギリに関わっていた人数は指導者三人を含めて九人ほどであった。最初は全部で二〇人ほどいたが、最終的に生徒は六人になった。

太鼓とすり鉦は町で所有し、笛は各自、竹で作った。太鼓ができたのはI氏を含めて二名だけであった。楽譜はなく、口伝で覚えた。指導者の横に並んで運指を覚え、押さえる穴を示した図を作って、それを曲の音の順番に書いたものを見て覚えた。「御遣り」・「神楽」・「奉演間(四段まで)」・「戻り山」・「出笛」を練習したことがある。

一月におこなわれるオコナイのほか、地藏盆や春秋の祭礼や正月に吹いていた。

保存会が消滅したのは平成九年頃のこと、若い人が入ってこなかったのが理由のひとつであった。

(4)長浜市布勢(旧長浜市)

HT氏(大正一四年生まれ)によれば、布勢では北野神社の祭礼で奉納する獅子舞があり、若い衆が獅子舞やシャギリを練習していた。HS氏という笛や太鼓、鉦の達者な人物がおり、その人に指導してもらった。そのなかでも習熟した人が長浜曳山祭に声をかけてもらった。楽譜はとくになく、「ヒョーヒョーヒョーウチ、ヒョーヒョーウチ」といっ

て吹きながら覚えた。

H T氏は四〇歳代のときに曳山祭へ行っていた。自身は中断しながらも六〇歳位まで行っていた。

長浜曳山祭に行くきっかけはよくわからないというが、当時は、H S氏から曳山祭に声をかけてもらった。祭りの時期になると「来てください」という連絡がH S氏に入り、皆に連絡が入るといふ感じであった。一三日から一五日に壽山（大手町組）に上がり、いくらか日当をもらった。

布勢からはH S氏を含め四人ほどが祭りに参加していた。しかしH S氏は指導者の存在のため直接曳山には上がっていなかった。長浜曳山祭で吹く曲は、とくに曲名などは知らず、「このときにはこの曲調のもの」という感じであった。H T氏によれば獅子舞のシャギリと長浜祭のシャギリは曲が同じようなものであった。

山組でのシャギリは一グループ七人くらい必要で、大戌亥の人と一緒に吹いたことがあるように記憶しているが曖昧であるとのことであった。

そのほか米原祭にも行ったことがあるが、どういう経緯で行ったか、またどの曳山に行ったかは記憶にないという。

(5)長浜市唐国（旧虎姫町）

唐国では大正期には、「ハヤシ」を演奏できる人たちがいたが、その人たちが戦争に行くなどして、昭和初期には演奏されることはなくなり、H T氏（昭和四年生まれ）も子どもの頃はハヤシを聞いたことがなかった。

昭和二二年、当時四〇歳前後と推測されるT氏が一人で若い人に笛を

教えるようになったので、当時一八歳のH T氏は、近所の同年代の人たち三人で練習に行き、その年の一二月から翌年四月までの農閑期の間、毎日練習に通った。当時は最大で一〇人くらいが教えてもらっていたが、楽譜はなく、先生の笛を聞き、「口ずさみ」をし、指を見て覚え、わからない場所は質問し、家で練習をするというものであった。何度か参加する人はいても、続く人は少なく、結局四、五人しか残らなかった。その会を唐国笛声会と称した。

長浜からの依頼はT氏に来て、笛声会で長浜に行った。曳山祭での演奏は昭和二四年からで、鳳凰山（祝町組）に上がったほか、壽山、孔雀山（神戸町組）にも行った。T氏が太鼓を叩き、五人くらいで笛を吹いた。昭和二四年以降、五年ほど行き、依頼が途絶えた。

笛声会は長浜以外にも米原の曳山祭、敦賀の祭り、彦根のパレードなどに呼ばれて行っていたが、これらは単発の依頼であった。そのほか、夏は毎日、笛声会のメンバーで夕涼みに国道に出て笛を吹いていた。

昭和三〇年代にはT氏が亡くなり、昭和四〇年代から昭和末頃までは、シャギリを演奏する機会もなく、笛声会の活動は途絶えていたが、平成に入った頃に活動を再開した。小学生を集めて、会館で教えたり、新たなメンバーを募集して教えたりした。当時の募集は男性に限っていた。その頃は、長浜市下八木の祭りに出たり、敬老会で演奏したりした。

現在、伝承者はH T氏だけになってしまったが、唐国のハヤシを伝えたいという女性グループ「社戯里、S」が練習に励んでいる。

(6)長浜市大戌亥（旧長浜市）

N F氏（昭和一一年生まれ）によれば、彼の父親（明治三六年生まれ）

が中心となったシャギリのグループがあった。シャギリは、好きな者が参加しているもので、メンバーは一〇人くらいであった。そのうち都合のよい五、六人で曳山祭に行っていた。亭は狭いので、亭に上がれる五、六人で笛・太鼓・すり鉦をしていた。自転車がない頃は歩いて行っていた。

「おひやら（御遣り）」・「神楽」・「戻り山」・「出笛」・「起し太鼓」をしていたのは覚えており、場面によって演奏する曲は違った。NF氏の父親は、笛も太鼓もすり鉦もすべてできた。楽譜はなく、年齢の上の人が下の人に口伝で教えるという伝え方であった。

NF氏の父親は戦前にも曳山祭にシャギリをしにいていた。明治二〇年代生まれの人でもシャギリをする人がいたが、それより以前は不明である。

長浜曳山祭のシャギリは山組の人が頼みにきた。NF氏の父親が請け負い、大戌亥のメンバーに声を掛けて人数を集めるシステムであった。大戌亥はシャギリで名がおっており、山組から毎年のように声がかかって曳山に上がっていた。手間賃がいくらからもらえた。

猩々丸（船町組）と月宮殿（田町組）以外に行っており、孔雀山・鳳凰山・萬歳樓（瀬田町組）・青海山（北町組）に行ったことは覚えているという。九日の稽古場での線香番から一六日まで行っていた。起し太鼓にもメンバーのうち一人か二人が行っていた。

大戌亥での祭りやオコナイではシャギリをしないが、米原祭にも毎年シャギリをしにいていたという。長浜曳山祭に行かなくなると、シャギリの伝統を守ろうかという話もあったが、サラリーマンが多くなり、シャギリを練習することができなくなったためシャギリはなくなった。

(7) 長浜市四ツ塚（旧長浜市）

IS氏（昭和七年生まれ）の話によれば、戦前、四ツ塚には祭囃子は伝わっていなかったという。当地にシャギリを広めたのはNM氏であった。

彼は大戌亥で大工をされており、大工光と呼ばれていた。大戌亥に住んでいたときにシャギリを覚え、四ツ塚に引越してきたのちにシャギリを広めた。

IS氏は、長浜曳山祭へ行きたくてシャギリの練習に参加した。IS氏が一九歳くらいの頃にNM氏よりシャギリを教わった。若い衆などの組織として習ったわけではなく、好きな人が寄ってシャギリを習っていた。紙に「ウー」や「ヒョー」などが書かれたものを基本に笛の練習をしたが、楽譜では音の高低や長短、リズム、節が伝わらないので、歌を歌いながら理解しなければならなかった。それを覚えてから笛の練習を始めた。指の塞ぎ方を覚えてから、師匠の太鼓に合わせて吹く練習をした。練習には、締め太鼓・大太鼓・すり鉦があった。太鼓も楽譜はなく、「テンツクテンテン」といって覚えた。IS氏は師匠の後ろで笛を吹きながら、師匠が太鼓を叩いているのを見て覚えた。

シャギリの練習を始めて七年くらい経った昭和三年から曳山祭に出た。初めて上った曳山は高砂山（宮町組）であった。当時、長浜では囃子方を求めている。当時は近郊村落からシャギリのできる人が来ており、四ツ塚のほかは唐国や米原の中多良という村落から来ていた。中多良は米原祭にも関わっている。祭りは線香番から加わり、町家の稽古場へ行ってシャギリを吹いた。

「戻り山」・「御遣り」・「神楽」・「出笛」・「奉演間」をしたが、「起し太鼓」はしていなかった。「起し太鼓」は山組の人がするものであった。猩々丸・

月宮殿は自町でシャギリをしていた。曲が違っているのでシャギリをしに
いかなかった。シャギリの節が独特で四ツ塚のものは合わなかった。

高砂山のほかに、萬歳樓・壽山・青海山といった山組の曳山にも上が
っていた。

昭和三一年以降は毎年亭へ上がって演奏していた。特定の山組だけと
いうわけではなく、狸々丸・月宮殿以外はこの山組へも行っていた。

IS氏がシャギリに関わっていた頃、山組の人は狂言の方に関わって
いたのでシャギリをできる人はほとんどいなかった。

シャギリの依頼は山組の人からNM氏へきていた。NM氏が「今年
は○○の山組へ行く」と決めたという。山組の人は大戌亥や四ツ塚など
のシャギリをする村落を知っていて、山組の若い衆がシャギリをする
各村落へ頼みにいっていたようである。しかし、ほかの村落の人と一
緒に亭へ上がることはなかった。山組へは線香番から山組の稽古場へ
行き、音あわせをした。祭りに出ている間は食事やお酒が出て、お礼
もいくらからもらえた。NM氏がまとめてもらって、分配していたという。
NM氏が亡くなったあと、IS氏のもとに直接依頼しにきて、長浜曳
山祭へ参加したという。

四ツ塚の祭りでシャギリをすることはなかったが、宴会で頼まれるこ
とがあったほか、夏場の畑の夜番の際に夜通しシャギリをしていたこ
とがあった。また、米原祭へもシャギリをしにいらっていた。米原祭で
は南町組に出ている。米原では四ツ塚のほかに中多良・大戌亥・唐国
からもシャギリをしにきていた。米原では、大戌亥・唐国の人と一緒
に曳山へ上がったことがあった。

以上、七地域を詳しく述べたが、この地域以外にも、いくつかの周辺

村落の人びとがシャギリのために祭りに参加していた。

③ 地元独自のまつりへの転換期

昭和三〇年代に入ると囃子方が集まりにくくなっていった。ある山組
では村落にシャギリを頼みにいっても、一度では受けてくれず、何度
か交渉に行き、やっと祭りに参加してくれたが、トラブルがあれば曳
山を降りてしまうこともあった。また、別の山組では接待するのが大
変であった。自町でシャギリをしたら、金銭面などの負担が減るとい
うこともあり、経済的事情も理由の一つであったと考えられる。

一方周辺地域では、昭和四〇年頃までは長浜へシャギリをしにいら
たが、行かなくなった理由として山組の人が自分でシャギリをするよ
うになったり、子どもたちがシャギリをするようになったこと、シャギ
リを担っていた周辺地域の人びとの仕事の変化などがあつたと認識し
ている。農業からサラリーマン化、また仕事の変化などで時間が取れ
なくなったシャギリの担い手が多くなったと考えられる。

戦前・戦後は人が不足している関係で他地域からの応援も必要であ
つたが、山組の立場からは、経費の関係上、自町でシャギリをしたほ
うがよい時代になっていった。

④ シャギリ保存会への一歩

戦後、祭りの担い手不足から、雇いシャギリをしていた山組が多くあ
つた。昭和三〇年代以降、周辺地域からのシャギリもなくなりシャギ
リが満足に出来ない状況下で、自町でもしなないといけないという機運が
生まれ様ざまな取り組みがなされるようになった。月宮殿・狸々丸は

戦前から自町でシャギリをおこなっていたのでとくに問題はなかった。

萬歳樓は、戦後当初はシャギリの担い手不足により、近郊農村から囃子方を雇っており、自町での復活に際しても近郊農村からシャギリを教わっており、戦前の囃子と異なる点があるという。布勢の人に笛を習い、町内の人が譜面を書き起こしたというが、詳細はよくわかっていない。また月宮殿のシャギリの組織などを教えてもらった。萬歳樓は昭和二四年の祭りの復活時に再び自町でのシャギリが出来るように尽力し、昭和二〇年代後半から三〇年代に自町でシャギリをし始めた。昭和四〇年代中頃から後半には高砂山・狸々丸・諫鼓山・鳳凰山・米原に応援に行ったことがわかっている。

翁山では保存会ができるまで国友にシャギリを頼んでいた。昭和三〇年代には、自町で「起し太鼓」が出来る人がいたので国友の人と一緒にした。昭和四〇年前後から他地域から来るシャギリの人手不足に苦慮した。自町でシャギリをしたいという思いが強くあり、国友から教わる人もいた。保存会ができてからは保存会の曲を伝承している。

孔雀山では戦後、太鼓ができる大正生まれの兄と笛のできる昭和二年生まれの弟のK兄弟がいてシャギリに熱心であった。しかし孔雀山は一町で山組を形成しており、戸数が少なく、出番山ときは、狂言の執行などで手が足りず、自町シャギリをする余裕がなく、長浜市高月町雨森（旧高月町）の人が曳山に上がっていたときもあった。

K兄弟が昭和三七年頃、町内でシャギリを教え始め、そのときに数人が習ったという。K兄弟が手書きで書き起した、笛の穴を押さえるところが図で書き表された運指表や、口伝で教えていた。「ウーヒーヨー」などと歌って覚えたといひ、現在演奏している曲は一通り教わった。

孔雀山は昭和五二年に囃子保存会に加入し、楽譜は保存会のものを使うようになった。囃子保存会ができてからは、青海山・月宮殿・諫鼓山などからシャギリに五〜六人の大人の大人が手伝いに来ていたが、応援に来た山組によってシャギリの曲が異なった。

狸々丸はシャギリの練習のため、尺八の先生を呼んだこともあったが、なかなかうまく演奏できなかったという。この尺八の先生とは狸々丸のF氏のこと、青海山も囃子保存会が設立される前の昭和三八年頃指導をしてもらった。

狸々丸のF氏は長濱八幡宮で教えており、四つの山組から一〇人が来ていたが、最終的に青海山しか残らなかった。当時の若い衆（現在六五〜七〇歳くらい）が中心となり週に一回、一、二時間程度練習していた。伝統的な曲ではなく、F氏が月宮殿と狸々丸をミックスし、吹きやすとした新しい曲で、現在でも「豊公楽」と「太平楽」は伝承されている。

様々な動きがあるなかで、一番特徴的なのが、独自に保存会を作ろうとした狸々丸のF氏の動きであろう。のちの現在の囃子保存会に先んじていたが、新しい曲をつくり楽譜を印刷するなどシャギリを継承していこうという力強い思いが伝わってくる。

⑤ シャギリを通じての交流

シャギリを通じて、周辺地域、そして山組との交流も明らかになった。四ツ塚から本庄へ婿養子にいった人が本庄で仲間を集めシャギリをした。

シャギリを通じての地域間の交流はもちろんのこと、山組との交流も

おこなわれていた。昭和三〇年頃、高砂山の五、六人が四ツ塚のNM氏に笛を習いにきていたという。

⑥ おわりに

以上のように、囃子保存会設立以前の様子を中心に述べた。長浜曳山祭は地元の祭りであるが、祭りにとって重要なシャギリは本庄・南田附・大東・布勢・唐国などの周辺地域の人びとの力によっても成り立っていたことがわかった。また、シャギリ伝承のネットワークも網目のように張り巡らされていた。

線香番・本日の演奏は周辺地域の人びとが担っていたが、四月三日の未明に若い衆が笛や太鼓のシャギリで町内の若い衆や中老などの祭礼関係者の家々を起こしにまわる起し太鼓は、周辺地域の人びとの関わりも確認できたが、基本的には山組が中心になって演奏していた。また、周辺地域でも独自の楽譜を使用し、曳山祭の囃子関係者に伝承していたことが今回の調査でわかった。

周辺地域のシャギリを担った人びとにとって、曳山祭の曳山に上がることは、大変名誉なことであったといい、必要に応じて練習に取り組んでいたと考えられる。周辺地域の人びとが関わった要因は、布勢のように地元で獅子舞が伝承されている事で笛の吹ける者がいたり、地元祭礼において笛を吹いたりするなど、その地域に伝承基盤があったことが挙げられる。

シャギリを担っていた周辺地域の人びとの生活基盤が農業中心からサラリーマン化するにつれ、娯楽としてシャギリを習うことも少なくなり、曳山祭への参加も困難な状況になっていった。

シャギリを継承していきたいという地元の想いがいくつかの行動を起し、実を結んだのが昭和四六年の長浜曳山祭囃子保存会の結成である。保存会の結成は、祭礼が周辺部との関係から地縁的関係の祭りへと変化していった時期でもあると考えられる。地元コミュニティを重視し、自らシャギリを継承することで、多くの人々に「観てもらおう」祭礼になっていったのであろう。

現在、周辺地域には唐国のように、曳山祭に関わった古老からシャギリを守り伝えていこうと、活動をはじめた女性のグループがある。しかし、一方で、布勢のように地元で獅子舞と笛があるが、若者の流出などの理由から、継承が危うい地域もある。

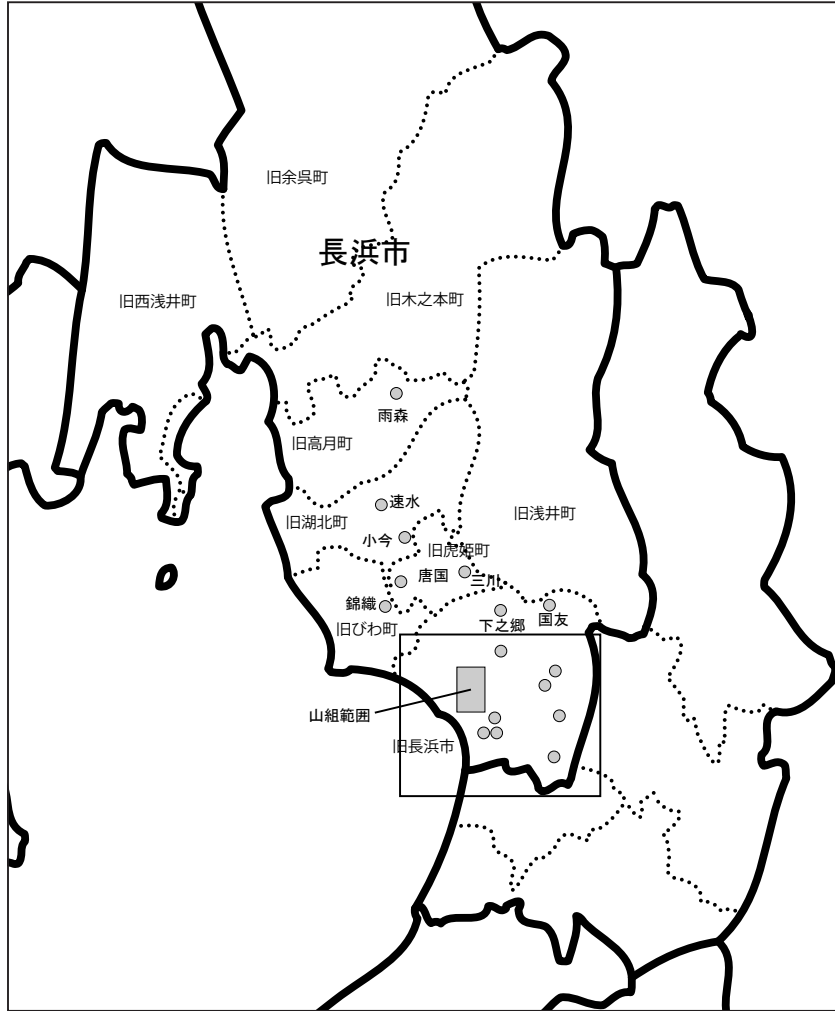
周辺地域のシャギリについては、いまわかつている地域以外にも携わってきた可能性もあり今後も引き続き調査する必要がある。

山組	戦前	戦後
月宮殿（田町組）		〔高橋・旧長浜市〕〔大戌亥・旧長浜市〕
青海山（北町組）		唐国（旧虎姫町） 八幡中山（旧長浜市）
諫鼓山（御堂前組）	三川（旧虎姫町） 明治20年頃 小今（旧湖北町） 大正14年頃 速水（旧湖北町） 昭和8年頃	国友（旧長浜市） 昭和29年頃～40年代 布勢（旧長浜市） 〔八幡中山〕〔下の郷東・旧長浜市〕
高砂山（宮町組）	南田附（旧長浜市） 大東（旧長浜市）	四ツ塚（旧長浜市） 本庄（旧長浜市） 大東
壽山（大手町組）	〔国友〕	布勢 〔国友〕
猩々丸	〔大戌亥〕	
鳳凰山（祝町組）	八幡中山 布勢	唐国 昭和30年前後
翁山（伊部町組）	国友	国友
常磐山（呉服町組）		四ツ塚 昭和28～40年頃
孔雀山（神戸町組）	大戌亥 南田附	雨森（旧高月町） 昭和37年頃
萬歳樓（瀬田町組）	大戌亥 南田附	大戌亥 本庄 昭和20年代 錦織（旧びわ町） 〔布勢〕

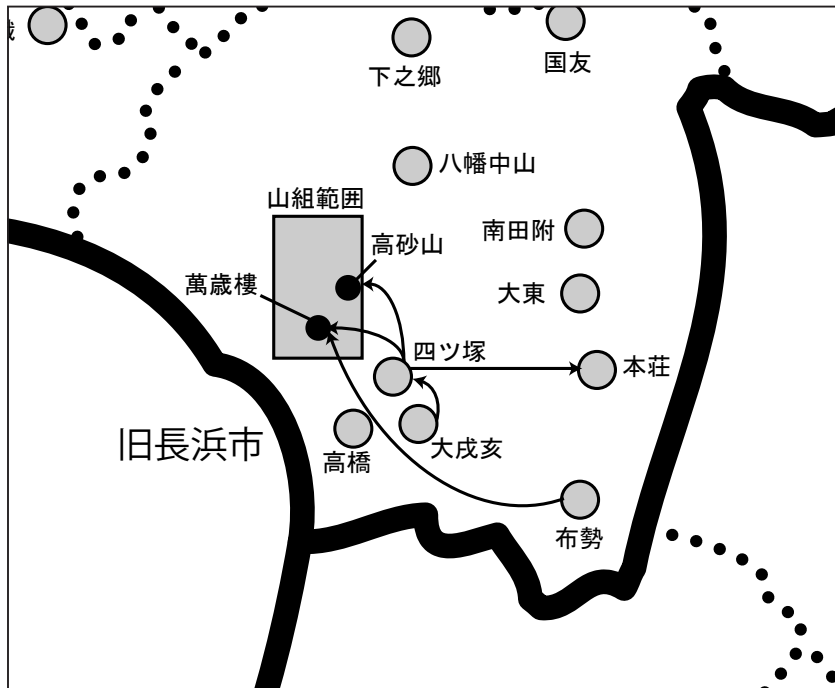
「戦前・戦後の周辺地域と山組とのかかわり」

*長浜囃子保存会の調査および平成23年の本調査より作成。

*情報が伝承のみで、正確に確認できていないものは〔 〕書きとした。



雇いシャギリの分布（枠内は下の拡大図参照）



雇いシャギリの分布およびシャギリの伝播（旧長浜市域）矢印は伝播を示す